

「一枚の絵」それから

コラム「一枚の絵の価値」についての質問に応えて一言付け加えておきます。

あの絵は、多くの人にラグビーの楽しさを再認識してもらうのに掛け替えのないものであるということです。いろいろな競技と並べてみて、例えばサッカーに関わる報道の前に、ラグビーは影が薄いのを嘆いている人らにとって、サッカーと比べて勝るとも劣らないラグビーの面白さを伝える材料として、この絵が価値ある貴重なものであるということです。プレーヤー一人一人が、ラグビーを愛し、自信を持って、ラグビーの良さを言えないようでは、いろいろなスポーツに興味をもっている人々を、ラグビーにひきつけて関心を持ってもらう事はできません。一人よがり「紳士のスポーツだ」なんて言っているだけでは場が白けるだけで、激突を誇り荒々しいだけで bright 知恵や片鱗も見いだせない試合では、「どこが・・・」と問い返されて困ってしまうだけです。さらに反省すべきは、本当に楽しいラグビーを、そんなに楽しくないものにしてしまっているのは、片寄った好みを大切にするプレーヤーたちです。全身を思うように使える、自由で簡単な競技を、不自由なややこしいものにしてしまっている責任を感じて反省しなければなりません。ルールも元は簡単で、本当はプレーしても見ても面白く楽しいスポーツです。

現実の違いは、考え違いの人たちが力まかせ暴れるだけの楽しくないものにしてしまっています。ルールも自分たちで分かりにくいものにしてしまっています。ルールの文字としては書かれていても、フェアプレーのもとでは不用なものを除けば簡単なものです。ゲームがもりあがる前によく途切れるから面白くないという批判は、現実の常態から否定できません。アメリカンフットボールは攻撃毎に前進がなければ途切れますが、それはそれなりに分かり易いもので不完全燃焼の元になりません。ラグビーではレフリーの笛で見えない反則を知り、「なーんだ」と無理に納得しなくてはならない場合が非常に多いのです。勝利至上主義に走るプレーヤーの姑息な行為が原因である観客にとって分かりにくい途切れがあるから面白くないのです。

ラグビーについて全くと言ってよい位知識を持っていない人に、普通にいうラグビーと少しルールの違うリーグラグビーの両方の試合を観戦させて感想を聞いたら、様に13人制のリーグラグビーの方が面白いという答えがかえってきます。理由はいろいろあげられますが、もっとも多くて大きいものは、途切れる数の多少と、理由として消化不良があげられます。例えば、スクラムを組むことなく、ボールを後ろへ投げる再開法もスムーズで、途切れを感じさせないというのです。

不可解なものとして、途切れの原因であるとともに、プレーヤーにとっても痛い苦痛を伴う億劫である筈の地上に倒れる行為があげられます。しかも無用の状態のものも多いのです。セービングと称してやっていることも効果や結果からみて地上に寝ることは無用に近いことが多く、ボールを持って簡単に倒れてしまわないことなども改善されなくてはなりません。

ぶつかる力を競う競技ではないのに、ぶつかり合い勝つことが全てと強調され過ぎています。身体と身体が接触する競技ですから、その接点での優劣は直後のプレーに全く影響ないとはいえませんが、当り勝つこと以外に接点での aggressive play はいくらでもかんがえられるのです。

現実の問題点を解決し、面白いラグビーに進化させ、ラグビー人口の増加をはかる使命を自覚し希望をもって進むことがもめられています。ラグビー誕生を物語るあの絵が志向しているものは、自由な力いっぱい走りまくって楽しむラグビーの創造であって、まさに、The name of the game is ENJOYMENT そのものです。

2006.09.17

西川 義行